法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-23

[最優秀賞受賞研究/ポスター部門] 大学生の海外フィールドワークにおける課題

遠藤, 千晶

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / 異文化
(巻 / Volume)
15
(開始ページ / Start Page)
164
(終了ページ / End Page)

(発行年 / Year)

2014-04

169

ポスター部門

大学生の海外フィールドワークにおける課題

国際文化学部 松本ゼミ 遠藤 千晶

2013年夏、松本ゼミ有志13名は松本悟准 教授とともにフィリピンで約1週間のフィー ルドワークを行った。目的はポホール灌漑事業 に関わる3者 (NIA・日本政府・農民) へのイ ンタピュー調査である。フィールドワークの実 施する上で、わたしたちが事前に想像していた ことと現実との違いや困難であった点を整理 しながら、大学生がフィールドワークを行う際 の方法論を再考したい。



発表メンバー 松本ゼミ:遠藤千晶 今津健太、馬場咲歩 高橋ゆりか、春名林

ボホール島 (Behel Island) フィリピン中部ヴィサヤ蘭 島の島であり、国内10番 目の大きさを持つ。人口は 約114万人、面積は4, 117平方キロメートル。 州郷タグピララン。

M. T. S. S.

8月7日 東京発マニラ着 8月8日 マニラ 飛行機でポホール島へ - 現地 NGO に関する説明/意見交換 ポホール ・大学生との交流 (フィリピンの大学生・若者 の抱える問題等) ・マリナオダム見学 (フェーズ1) · NIA 環地事務所動間 ・農民組織リーダー・NGO とのミーティング(リ **一ダーによる農民組織の説明等)** 8月9日 各村でのインタビュー調査 8月10日 各村でのインタビュー調査 ・パヤスダム、パヨガンダム見学(フェーズ2) ウパイ町ロスオン村訪問/移転住民への聞き 取り 8月11日 ・観光(チョコレート・ヒル、ターシャー、 パンラオ島ピーチ) マニラ 飛行機でマニラへ 8月12日 ・アジア開発銀行 (ADB) 表敬訪問 ·日本大使館で外務省・JICA との会合 8月13日 ・ストリート・チルドレン地域助間/意見交換 · 都市貧困層地域訪問/意見交換 マニラ市トンド地区のスモーキー・マウンテ ン付近の見学 宣宣 8月14日 マニラ発東京着



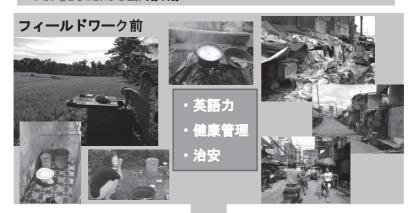






1. フィールドワーク前後の課題の変化

フィールドワーク前は英語力、健康管理や治安に問題がなければフィールドワークがうまくいく と思っていた。しかし、実際に経験してみるとそれらの問題よりも重要な課題があることを知っ た。そこで、問題があったインタビューを分析してみると、事前に想定していなかった3つの要 業に気が付いた。それは、余裕のあるスケジューリング、周辺地域の把握、通訳者とコミュニケーションをとることによる理解であった。





1-1.午前3時集合!?

既存文献で、フィールドワークでは余裕のあるスケジュール を立てる必要があると言われている。たとえば、

- 特定の予定を入れない予備日を設ける
- 1日の調査は日の沈む前に切り上げる

ことなどが挙げられる。なぜなら、これらの対策によって予期しない事態に対処することや、 また、調査結果をその日のうちにデータ化することができるからである。



スケジュールを立てる段階で、私たちは以下の2点を優先した。

①コストを下げること

②調査とは別に、興味・関心のある場所を訪問すること

- そして、現地コンサルタントや引率の指導教員と相談し、学生の希望に沿ったスケジュールが組まれた。
- →割安な早朝発の便を選んだ
- →現地の小学校、アジア開発銀行(ADB)、都市貧困層やストリートチルドレンの暮らす地域を訪問予定地に その結果、理想とされている余裕のあるスケジュールとはかけ離れたものだった。

フィールドワーク中

活動していく中で、スケジュールを詰め込みすぎたと感じた ことがあった。それは、眼気と疲労によりインタビューに集 中できなかった時である。これら原因は、

- ・慣れない環境であったために予想以上に疲れがたまっていたこと
- 朝早かったこと —
- インタビュー時間が夜遅くであったことであると考えた。

しかし、スケジュールに組んだ全ての場所を訪れたかったため、スケジュールの変更はしなかった。



とある1日のスケジュール

3:00 3:00 ホテルロビー集合、マニラからボホール島へ移動するため空港へ

5:30 5:30 マニラ出発

6:45 6:30 ボホール州都タグビララン市着 NGOオフィスへ(休憩、軽食等)

9:00 9:20 オリエンテーション(ボホールでの旅程、注意事項等)

NGOによる説明・意見交換

11:15 大学生との交流(フィリピンの大学生・若者の抱える問題等) 11:00 厚食

12:00 タグビララン市からビラー町へ移動

13:30 ピラー町着

14:00 マリナオダム見学 14:00 15:45 NIA現地事務所訪問(NIAスタッフによる事業・状況説明/意見交換)

16:00 16:50 ダゴホイ町カルワサン村へ移動(途中、主水路等見学)

17:30 17:45 カルワサン村着、夕食

20:00 農民組織リーダー・NGOとのミーティング

夜 22:30 ホームステイ

<u>フィールド</u>ワーク後

フィールドワークにおいて余裕のあるスケジュールをたてることの重要性を痛感した。

日本へ帰国後、インタビューの内容を譲事像としてまとめた。その過程で、参加メンバー間で内容確認をおこなったところ、同じインタビューにもかかわらず個々人で解釈が異なっていた点をいくつか発見した。また、その情報共有の中で新たに疑問が出てくることもあった。もし、余裕のあるスケジュールを立てていたら、インタビューごとに内容確認を記憶の新しいうちに行うことができ、その場で提問を解消することが可能だったのではないか。



1 - 2. ○▲※村ってどこ

既存文献では、フィールドワークを行う際には調査対象地だ けではなく、その周辺の地域を理解することも必要だといわ れている。



フィールドワーク前

以下の2つの点から、地理的な知識の必要性を感じていなかった。

- ① 常に現地 NGO スタッフが一緒に行動しているため案内してもらえる
- ② 村単位での聞き取り調査ということで、徒歩10分程度の距離を想像
- 〇調査対象地がポホール島のどこに位置するかを確認 ×調査対象地の規模の把握や、その周辺地域の情報収集 ×…やっていない

フィールドワーク中

困ったこと

困らなかったこと

に出てきた

聞きなれない村の名前が頻繁にインタピュー中 移動の際、道に迷うなどの事故は起こらなかった







フィールドワーク後(考察)

調査地だけでなく、周辺地域の把握が必要である。

なぜなら…

- ① 調査対象地域の抱えている問題は、その地域だけではなく、周辺地域とも深く関わっている
- ② 灌漑事業の調査では、ダムから調査対象地域の村まで、水路からインフォーマントである農民 の家までの距離を把握すべき
- ③ 質問をする際にも、全体像をイメージしながらより的確な質問ができる

1 - 3. 話、噛み合ってない!?

既存文献では、調査を円滑に進めるうえで通訳者を 介する場合には、フィールドワーカー・通訳者間の コミュニケーションは重要だといわれている。



フィールドワーク前

調査地域であるポホール島のインタビューでは

- 現地語であるヴィサヤ語から英語の通訳を介すること
- 通訳者は現地 NGO スタッフや大学生であること
- を事前に知った。そのため、英語で聞き取りや話ができ
- るかなど自分たちの英語力に不安を抱いていた。



フィールドワーク中

私たちが英会話をする際に使う単語と通訳者が使う単語が違った。そのため、インタビュ 一中に通訳者を介して、質問とずれた内容の回答が返ってくるなど、お互いの話が噛み合 わないことがあった。これを改善するために以下の2点を意識して話すようにした。

- 使っている言葉を他の言葉に言い換えてみること
- 質問をしたい意図をわかりやすく話すこと

また、インタビュー外では

- ・話し合いを重ね、問題意識を統一した
- ・行動を共にし、信頼関係を構築した







フィールドワーク後(考察)

英語力だけではなく、相互理解を深めながら進めていくことが重要だ

私たちはこの問題をフィールドワーク中に克服することができた。なぜなら… ①通訳者との意思疎通をはかったから

②フィールドワークを通して通訳者が変わらず、軌道修正が可能だったから

2. 大学生がフィールドワークを行う際の3つの制約

スケジュール・周辺地域の把握・遷訳者とのコミュニケーションなどの問題から、私たちは大学生がフィールドワークを行う際には3つの飼的があると考えた。今回、私たちのフィールドワークのスケジュールは、低コストに抑えることに智意しつつ、1週間という短い期間に調査・研究と見学の両方を登り込んでいた。

①時間:大学生であるために限られている

②資金:低コストにおさえたい

期間を延ばすことはできない







③興味・関心: なるべく多くの場所を訪れたい

見学地を減らしたくない

3. 大学生版フィールドワーク論を!

3つの飼約の中で起こりうる問題を解決するには時間や資金を増やすか、学生の興味・関心に基づく見学を減らすしかない。大学生のこうしたジレンマに対して、既存のフィールドワークに関する文献では明確な答えは示されていない。ではどうすればいいのだろう。答えを出せるのは大学生自身である。法政大学では様々な学部で海外フィールドワークが実施されていると聞く。皆、私たちと同じようなジレンマに陥っているはずである。そうした経験を互いに学び合い菩薩することで、「大学生にとってのフィールドワーク論」を作り上げる必要があるだろう。今後の課題としては、いかに経験を共有し合うことが出来るかという点にあるといえる。たくさんの仲間と多種多様なフィールドワークの経験を大いに共有していきたい。